

【論 文】

蘇軾の同時に作られた詩詞について ～特に初期の作品を取り上げて～

保 莉 佳 昭

要 旨

中国北宋時代（960年～1126年）、韻文文学には、伝統の「詩」と新興の「詞」があり、当時の文人は、両者を時々で作り分けた。しかしながら、従来、詩詞に詠まれている内容を実際に比較しながら両者の相違を論じることは殆ど行われてこなかった。そこで本稿では、特に蘇軾（1037年～1101年）の初期の詩詞を取り上げ、詠われている内容を読み解くことから両者の相違を考察してみた。その結果を要約すれば、以下のとおりである。蘇軾の詩は、士大夫の立場に立ち、自らの考え、情感を前面に出して詠っている。歴代の皇帝を容赦なく非難し、視野が狭い「愚儒」に対する皮肉を遠慮なく述べている。更に、大きなスケールで描き、造物主、東海の神、政府が行っている水利事業まで言及する。一方詞は、自らの考え、情感を直接には語らず、風景描写を用い、象徴的に間接的に表現している。また、その思いは、士大夫に限らず、人間誰もが共通に抱く感懐である。また、歌姫、妓女、男女の情事が多く描かれている。

これらの相違は、伝統の詩が士大夫として身に付けるべき教養の一つであり、自らの主張を世にアピールするための文学であったのに対して、新興の詞は、もともと宴席で興を添えるところから始まった、文学性の色濃い、表現の美しさを競う文学であったことに因ると考えられる。

1 はじめに

自分の思いを文字で表現しようとする場合、どの文学様式を用いるかは大きな問題である。中国北宋時代（960年～1126年）、韻文文学には、『詩経』以来長い伝統を持つ「詩」と、宋代（960年～1279年）に隆盛を迎えた「詞」があった。当時の文人は、時々において、この二種類の韻文文学を使い分けて自らの思いを詠んだに違いない。しかしながら、従来、詩詞に詠まれている内容を実際に比較しながら両者の詠み分けを論じることは殆ど行われてこなかった。本稿はこの点に着目して、詩詞を詳しく読み込み、両者の内容の相違を比較することから、詠み分けを考察してみる。

皇帝（在位前221年～前210年）、唐の玄宗皇帝（在位712年～756年。名は李隆基^{りりゅうき}、第六代皇帝）らが離宮を置いた。玄宗皇帝が政治をおろそかにして、楊貴妃^{ようきひ}（719年～756年）とたびたび温泉の華清池に遊んだのは有名である。また、秦の始皇帝の墓陵も、驪山から近い所にある。秦は中国初の統一王朝ではあるが、二世皇帝（在位前210年～前207年）で終焉を迎え、非常に短命であった。そのような由来のある故地を訪れば、思いは当然、秦、唐の事に至り、文学の創作意欲が湧く。蘇軾もここで、「驪山三絶句」詩三首と「華清引」詞を作った⁵⁾。以下、順番に、「驪山三絶句」と「華清引」を見てみる。

驪山三絶句 其の一（『蘇軾詩集合注』卷三）

功成惟欲善持盈，可歎前王恃太平。辛苦驪山山下土，阿房纔廢又華清。

【大意】国家の大功が成就した後は、ひたすらしっかりと繁栄を維持するように努力するものだが、嘆かわしいことに、前朝の王は太平だのみで何もしなかった。驪山のふもとの土よ、お疲れ様。阿房宮がやっと廃れて消えたと思ったら、また華清宮が建てられたのだから。

本詩はまず、皇帝というのは国家の創成、国家の繁栄を成し遂げた後、それを維持するのが努めだ、と説く。その感慨を抱いたのは、もちろん驪山を目の前にしたからである。驪山は、唐の玄宗皇帝が楊貴妃のために華清宮（温泉宮）を建て、毎年十月、二人して行幸した地。都の長安の郊外にある。第二句目の「前朝の王」は、その玄宗皇帝を指す。玄宗皇帝は開元の治と言われる善政を行い、唐王朝の絶頂期を築いたが、後に楊貴妃にのめり込み政務を怠って安史の乱を引き起こし、国家の危機を招いた。蘇軾は、「玄宗皇帝が目前の平和をたのみとして、繁栄を維持する努力を怠った」と嘆く。また、秦の始皇帝も持ち出す。「阿房宮」は、始皇帝が築いた大宮殿で、完成まで十五年間を費やし、常軌を逸した大建築物であったという。しかし、この宮殿も、始皇帝の死後、四年して項羽（前232年～前202年）によって焼き払われた。「阿房宮」は、驪山からほど近い所に建てられたので、蘇軾は「驪山の麓の土」に語りかける形で、皮肉を言ったのである。

驪山三絶句 其の二

幾変彫牆幾変灰，举烽指鹿事悠哉。上皇不念前车戒，却怨驪山是禍胎。

【大意】何度美しい壁に変わり、何度灰に変わったことか。烽火を上げた幽王、鹿を指して馬と言わせた趙高を信頼した秦の二世皇帝、でたらめな事よ。玄宗皇帝は先人の戒めを考えず、驪山が禍のもとだと怨んだ。

この詩も、前作と類似の内容になっている。唐の都である長安は、前漢、後漢、前趙、前秦、後秦、西魏、北周、隋が次々と都を置いた古都である。秦の都である咸陽も渭水を挟んだ向かい側に位置する。冒頭の「何度美しい壁に変わり、何度灰に変わったことか」は、近くの咸陽も含め、「ここでは、古来、幾多の興亡が繰り返されて来たことか」と感慨を述べたものである。そして、周の幽王（在位前782年～前771年。第十二代の王）と秦の二世

皇帝の「でたらめ」さに言及する。周の幽王は妃の褒姒（生卒年未詳）を笑わせるために、異民族の襲来が無いにもかかわらず狼煙を上げて諸侯を集め、諸侯の信頼を失い、遂には犬戎族に驪山のふもとで殺された。また、秦の二世皇帝は宰相の趙高（?～前207年）に全幅の信頼を寄せていたが、趙高は皇帝に鹿を献上して「馬だ」と言い、「鹿」と言った者を処罰した。二世皇帝はこれを黙認し、最後は趙高に殺された。このような過去の教訓があるにもかかわらず、玄宗皇帝はそれを考えず、自分が招いた禍を驪山のせいにした。

驪山三絶句 其三

海中方士覓三山，
萬古明知去不還。
咫尺秦陵是商鑿，
朝元何必苦躋攀。

【大意】秦の始皇帝は大海の中に道士を行かせ三つの仙山を探させたいけれども、行ったきり戻って来ないのはずっと以前から明らかに知れたこと。目の前の秦の墓陵こそ戒めである。だから、朝元閣に苦労して上る必要などないのだ。

本詩では、道士の徐芾（生卒年未詳）の事を出す。彼は始皇帝に書を奉って「大海に三つの神山があり、仙人が住んでおります。私たちは身を清め、穢れ無き童男童女と共に仙人を探しに行きたく存じます」と願い出た。始皇帝は徐芾に金品を与え、仙人を探させ、不老不死の仙薬を持ち帰るように命じた。しかし、彼は戻って来ない。不老不死の仙薬などあるはずがないからである。それを必死に探し求めた始皇帝も、今は墓に眠る。「仙薬を求めるのは愚行。目の前にある始皇帝の墓が、なによりもの戒めだ」。蘇軾はこのように言う。「朝元閣」は、驪山の頂上にあつた、道教の祖である老子を祀った廟。道教は修行のために錬丹術を使って不老不死の仙薬を作り仙人となるのを理想とする。最後の句は、「人間は所詮死を免れないのだから、わざわざ道教の廟に行く必要などない」ということ。

華清引（『宋傳幹注坡詞』卷十二）

平時十月幸蓮湯。玉甃瓊梁。五家車馬如水，珠璣滿路旁。／翠華一去掩方牀。獨留煙樹蒼蒼。至今清夜月，依前過繚牆。

【大意】（玄宗皇帝は）平和な世の中になると十月に蓮花湯へ行幸するようになった。その壁と梁は美しい宝石でできていた。（同行した楊貴妃の）五家の車馬は川の水のように絶え間なく長く続き、（その通った後）道じゅうに宝飾品が落ちていた。／しかし、（安史の乱で）皇帝の御旗が西方に去ってからは、皇帝の寝台は覆いが掛けられたまま使われていない。ここには鬱蒼とした木々が残るだけ。今に至るまで、月は清らかな夜に昔と変わらず華清宮をめぐる垣の向こう側から天空に昇る。

詞は、まず、玄宗皇帝が「国家の大功が成就した後」、楊貴妃と華清池の蓮花湯に行幸したことを述べる。「蓮花湯」は、楊貴妃専用の、贅を尽くして作られた浴室の名。「五家」は、楊貴妃の一族を指す。楊貴妃が玄宗皇帝の寵愛を受けたので、その一族も皆、高官に取り立てられたり、多くの金品をもらったりした。彼らは華清池への行幸にも加わり、その行列は川の水のように絶え間なく長く続き、道じゅうに宝飾品を落としたという。玄宗

皇帝と楊貴妃にまつわる伝承は多くある。ただ蘇軾はここで、二人が贅を尽くした逸話を述べない。その周囲にいた楊貴妃の一族までもが「行幸に加わり、その車馬の列が川のように絶えることなく続き、後には宝飾品が道じゅうに散らばっていた」と表現することで、玄宗皇帝の「でたらめ」さを一層際立たせている。しかし、蘇軾は「嘆かわしい」「でたらめな事よ」「戒め」という言葉は一切使わない。むしろ淡々とした筆致で綴る。

詞の後半は、目の前の華清宮を詠う。「皇帝の御旗が西方に去って」は、玄宗皇帝が安史の乱を避けて、蜀（四川省）に逃げたことを指す。それ以後、玄宗皇帝、楊貴妃がここを訪れることはなかった。今の華清宮には、当時の華々しさはなく、ひっそりとしている。昔と変わらないのは木々と月だけ。移り変わる人事と変わらぬ自然との対比は、古来、文学で多用される手法である。

以上、「驪山三絶句」詩と「華清引」詞を見た。「驪山三絶句」詩は三首とも古代の皇帝、王の愚行を直接的な表現で批判する。周の幽王、秦の始皇帝、二世皇帝、唐の玄宗皇帝を容赦なく「嘆かわしい」「でたらめな事よ」「戒め」という言葉を使って非難する。当時、蘇軾は数え年二十九歳の理想に燃える若者であった。ましてこの時、彼は鳳翔府簽判の任を終え、意気揚々と都に上る途中であった。北宋官僚は、治国平天下を究極の目標、理想とした。そのような雄大な理想を抱いた「官僚の卵」が驪山を訪れば、国家、政治に関する思いが湧き上がるのは当然である。蘇軾はその思いを、伝統文学の詩を使って綴ったのである。

一方詞は、自らの思いを直接には語らない。前半で玄宗皇帝と楊貴妃についての伝承を書き、後半で目の前の情景を描く。嘆きもせず、「でたらめだ」とも叫ばない。そして、鬱蒼とした木々と、昔と変わらず天空に昇る月の描写で作品を結ぶ。本詞を読めば、この「木々」と「月」が、不変で雄大な自然の象徴だとすぐ分かる。蘇軾は、昔から今に至るまで変わらずに続く自然を描くことで、小さい存在の人間、贅を尽くすことの愚行を際立たせてみせたのである。それは、治国平天下を目標とする官僚であって初めて共感できるものではない。人間誰もが共通に抱く感懐である。詞は、自らの思いを直接に叫ばない。むしろ、風景描写を用いて、象徴的に表現している。

3 「十月十六日記所見」詩と「南歌子（紺縮双蟠髻，琥珀装腰佩）」詞

熙寧元年（1068年）七月、蘇軾は父親の喪が明けた。その年の冬に、故郷の眉山（今の四川省眉山）を發ち、都の開封（今の河南省開封）に向かった。都に着いたのは、熙寧二年二月であった。当時、新進気鋭の皇帝神宗（在位1067年～1085年。名は趙頊、北宋第六代皇帝）は、逼迫した国家財政を再建するために、王安石（1021年～1086年）を抜擢して改革を推し進めようとした。王安石は、次々と新しい法案を出し、急進的に改革を進めた。ただ、彼のやりかたでは弊害が大きすぎると考え、異論を唱える者も少なくなかった。当時、官僚達はみな財政再建の必要性を痛感していた。ただ、急進的に行うか、徐々に行うかで意見が対立し、政界は二つのグループに分かれ、互いに激しく対立した。改革

を急進的に進めようとするグループを新法党と言い、徐々に進めようとするグループを旧法党と言う。蘇軾は、財政再建の必要性を十分に分かっていたものの、王安石が進める急進的改革には反対し、旧法党に属した。彼は王安石が出す法案に次々と反対した。そうになると、新法党は、蘇軾の存在が煙たくなり、追い落としを画策する。彼らは蘇軾が官僚に禁じられている商行為を行ったと訴え、それが疑獄事件に発展した。これは大事には至らなかったようだが、この一件で蘇軾は党争に嫌気がさし、熙寧四年（1071年）に地方官として都を出ることを願っていた。結局、同年六月、杭州副知事へ転出することが認められ、七月、蘇軾は都を出て、杭州への旅に出た。十月、楚州（今の江蘇省淮安）に立ち寄り、その際、楚州知事の周豫（生卒年未詳）が催す宴席に出た。そこで、「十月十六日記所見」詩と「南歌子」詞二首を作った。以下、まず、「十月十六日記所見」詩を読んでみる。

十月十六日記所見（『蘇軾詩集合注』巻六）

風高月暗雲水黄，淮陰夜発朝山陽。山陽曉霧如細雨，炯炯初日寒無光。雲収霧卷已亭午，有風北来寒欲僵。忽驚飛電穿戸牖，迅駛不復容遮防。市人顛沛百賈乱，疾雷一声如頽牆。使君来呼晚置酒，坐定已復日照廊。悦疑所見皆夢寐，百種變怪旋消亡。共言蛟龍厭旧穴，魚鼈隨徒空陂塘。愚儒無知守章句，論說黑白推何祥。惟有主人言可用，天寒欲雪飲此觴。

【大意】

風は強く、月は薄暗く、雲と川は黄色く、淮陰を夜に発って朝には山陽に着いた。山陽の朝霧は霧雨のようで、昇ったばかりの日は寒々として光に力が無い。雲と霧が消えて既に正午、北から風が吹き寒くて倒れそうになる。はっとして見れば、電が戸や窓から降り込み、すごい速さで防ぎようがない。市場の人々は慌てふためき、大ぜいの商人は大騒ぎになり、そこに雷鳴が突然、土壩を崩すほどの激しさで鳴り響く。知事が夜の酒宴に招いてくれたが、座客が揃った時には、日が廊下を照らしていた。先ほど目にした天変は全て夢の中の出来事に思え、あまたの異変は瞬く間に消え去ってしまった。座客はみな「さっきの天変は、蛟や龍が古い巢穴に厭きて別の所に移ったのであり、魚とスッポンはその後を追って移り池は空っぽになってしまった」と言う。無知な儒者達は経書の章句を後生大事に守り、その記述に基づき、吉凶を言い立て、先ほどの天変が何の前兆であるか推論してみたりした。しかし、信用できるのは、ここの主人の言う「天気は寒く雪が降りそうだから、この盃を飲もう」という言葉だけ。

本詩は、二十句からなる作品であるが、前半の十句は、「十月十六日記所見」という詩題どおり、目にしたことを綴っている。話は昨晚から始まる。昨日は「淮陰（今の江蘇省清江）」にいた。そこを夜に発って、今朝、「山陽（今の江蘇省淮安）」に着いた。ここは、楚州の知事の役所があった所である。山陽では朝霧がかかっており、昼になってやっと消えた。そこで天気が急変する。電が降り出し、雷鳴が轟いた。人々は右往左往で大慌て。ただこの急変は瞬く間に消え去った。

後半十句は、酒宴の場面になる。この日、楚州の知事である周豫が夜の酒宴に招いてく

れた。天変は全て夢の中の出来事に思えるほどに、瞬く間に過ぎ去ったが、酒宴に集まった人々は、当然、先ほどの天候の急変を話題にする。口々に「さっきの天変は、蛟や竜が動いたことで起こったのだ」と言う。そして、経書の記述を引用して、この天変は吉か凶か、また、何の前兆であるか推論する。しかし、蘇軾はここで、彼らを「無知な儒者達」と言い、そんな議論など全くいい加減なものだと論破する。これは、何でも経書に基づいて解釈しようとする儒者の性癖をあざ笑った言葉と言えよう。そして最後は、「(愚儒の言うことなど信用できない) この宴会の主人である周豫さんの言う『天気は寒く雪が降りそうだから、さあ、酒を飲もう』という言葉だけが信用できる」と作品を結ぶ。皆はいつまでも議論を続けていたのだろう。宴会を催した楚州知事の周豫は、タイミングを見計らって、「さあ、飲もう」と、宴会開始の「発声」をする。本詩は、せっかくの酒席を、経書の記述を持ち出し、へ理屈をこねて台無しにしている無粋な連中を黙らせるために作ったように感じられる。ただ、詩はここで終わる。続きは、詞で描かれている。

南歌子 楚守周豫出舞鬢 其の一 (『宋傅幹注坡詞』卷五)

紺結双蟠髻，雲歛小偃巾。輕盈紅臉小腰身。曄鼓忽催花拍，闔精神。／空闊輕紅歇，風和約柳春。蓬山才調最清新。勝似纏頭千錦，共藏珍。

【大意】

舞姫の二つの螺旋の髻は紺色の紐で結ばれ、雲の黒髪に小さな頭巾が斜めに載っている。見目麗しい顔、細くなよやかな腰つき。初めに太鼓が続げざまに叩かれ、急に花板が打たれて、曲のテンポが速まる。彼女は精神を集中して、舞いは高潮に達する。／彼女はあたかも空中をひらひら舞う赤い花びらのようで、また、そよ吹く風に揺れるヤナギのようである。集賢校理の周豫さんは傑出した文才をお持ちで、舞姫のために作られた詩歌は非常に清新である。その詩歌は価値あるもので、舞姫に褒美で贈られる錦の纏頭にも勝ります。

この「南歌子」詞は二首連作で、詞序に「楚州の知事である周豫が舞姫を登場させた(楚守周豫出舞鬢)」とあるように⁶⁾、専ら宴会の舞姫のことが描かれている。

本詞は、まず舞姫の髻、黒髪、頭巾、顔、腰つきが書かれ、次に舞う姿が描かれている。彼女は空中を舞う赤い花びらのように軽やかで、また、揺れるヤナギのようになやかである。そして最後は周豫に言及する。周豫は舞姫のために詩歌を作った。その詩歌は、客人が舞姫に贈る錦にも勝る価値のあるもの、と褒め称える。次の第二首も、類似な内容になっている。

南歌子 其の二

琥珀裝腰佩，竜涎香入領巾。只应飛燕是前身。共看剥葱纖手，舞凝神。／柳絮風前轉，梅花雪裏春。鴛鴦翡翠兩爭新。但得周郎一顧，勝珠珍。

【大意】

琥珀で飾った腰の帯、竜涎香を焚き籠めたスカーフ。舞姫は趙飛燕の生まれ変わりに違いない。座中の客は皆、細い彼女の指と一心不乱に踊る姿を見る。／彼女は、風に転ずる

柳絮^{りゅうじよ}、雪降る中で咲き誇る梅、鴛鴦^{おしどり}と翡翠^{かわせみ}が艶やかさを競うかのよう。周さん（周豫）に気に入られ振り返ってもらえばそれでいい、値の張るご褒美に勝ります。

舞姫は、琥珀の帯を締め、竜涎香を焚き籠めたスカーフを巻いている。そして、彼女が趙飛燕の生まれ変わりだと称える。「趙飛燕」は、前漢末の女性で成帝の皇后。もと踊り子の出で、軽快な身のこなしが燕を思わせるところから飛燕と称された。舞姫を「趙飛燕の生まれ変わり」と称するのは、最高の賛辞であろう。客人は皆、細い彼女の指と一心不乱に踊る姿に見惚れる。これに続き、彼女の舞う姿を風に転ずる柳絮で表し、彼女の清楚な雰囲気や雪降る中で咲き誇る梅に喩える。そして、彼女の美しさを鴛鴦と翡翠が艶やかさを競うかのようだと表現する。彼女の願いは、周豫に気に入って振り返ってもらうこと。振り返って見てもらうことは、値の張るご褒美に勝る。詞の最後は、舞姫の周豫に対する愛情を述べている。もちろん、周豫は彼女がお気に入りである。だからこそ、蘇軾はこの詞を作り、彼女を称えることで、酒宴に招待してくれたお礼としたのである。

詞は、『花間集』の作品がそうであるように、そもそも宴席で興を添えるものであった。よって、詠われる内容は、主に妓女のなまめかしい姿態、恋愛、別離の悲哀などであった。この詞も、宴席で踊る舞姫の姿を詠っており、言わば典型的な作品と言える。この詞が作られた熙寧四年は、蘇軾の作詞実践という観点から見ると、初期の習作期に当たる⁷⁾。蘇軾は後に、この「典型的」作風を打破し、新たな境地を開くが、ごく初期の習作期は、旧来の作を真似て、「典型的」な作品を作っていたことが分かる。

以上「十月十六日記所見」詩と「南歌子」詞を見た。これらの作品が書かれた日には、二つの出来事があった。それは、急な天候の変化と、宴会であった。宴会を描くのに詞が選ばれたのは、異論のないことであろう。特に歌姫を詠うのであれば、詞が使われるのが常套である。では、急な天候の変化はどうか。これも詞で描いて全く問題ない。しかし、蘇軾は天候の変化以外に描きたかったことがあった。それは、「愚儒」に対する皮肉である。伝統的な経書のみにとらわれて視野が狭いのが「愚儒」である。それは、官僚、官僚志望者に多い。宋代、官僚になるには科挙試験に合格する必要があった。それには、経書の勉強が不可欠であった。その弊害として、伝統的な経書のみにとらわれて視野が狭い「愚儒」が生まれた。それに対する皮肉を述べるには、詞では荷が重すぎ、伝統文学の詩が選ばれたのである。ここから、蘇軾が詠う内容によって、詩と詞を使い分けたことが十分知れるのである。

4 「和邵同年戲贈賈収秀才三首」詩と「双荷葉」詞、「荷花媚」詞

熙寧五年（1072年）十一月、杭州副知事であった蘇軾は湖州（今の浙江省湖州）出張を命じられた。湖州で堤防を建設する計画があり、その建設のメリットとデメリットを見に出かけたのである⁸⁾。同年十二月、湖州に到着し、そこで、旧知の邵迎（？～1073年）と再会した。その時、賈収（生卒年未詳）という人物と知り合った。そこで作られたのが、

「和邵同年戲贈賈取秀才三首」詩、「双荷葉」詞、「荷花媚」詞である。まず、「和邵同年戲贈賈取秀才三首」詩の第一首を見てみよう。

和邵同年戲贈賈取秀才三首 其の一（『蘇軾詩集合注』卷六）

傾蓋相歎一笑中，從來未省馬牛風。卜隣尚可容三徑，投社終當作兩翁。古意已將蘭緝佩，招詞閑詠桂生叢。此身自斷天休問，白髮年來漸不公。

【大意】

我々二人は会ったばかりにもかかわらず、旧友のように談笑する。今まで訪ねることも無く遠く離れて暮らしていたのに。私は隠棲してあなたの隣に住み、あなたと三本の小道を親しく行き来し、詩社に加わり遂には二人して仲良く年を取りたい。あなたは屈原のような古風な趣をたたえ高潔で（蘭を繫いで帯び物として）、俗世間から離れた所で隠者を招く歌をのどかに歌っている。自分の人生は自分で決めるから、天に尋ねるのをやめる。（貴賤に関係なく生える）白髪も年来、（貧乏な私の頭にも）不公平に生え出した。

本詩の題である「和邵同年戲贈賈取秀才三首」は、「邵迎の詩に唱和して、戯れに賈取に贈った三首の連作」という意味。「邵同年」は、邵迎のこと。「同年」というのは、蘇軾と同じ年の科挙に合格したことを示す。ただ邵迎は、役人としては不遇であり、地方官で終わった。また、「賈取秀才」の「秀才」は、科挙に合格しなかったことを意味する。賈取はいたく蘇軾に敬服し、「懷蘇亭」というあずまやを建て、詩一卷を作り『懷蘇集』と命名した⁹⁾。この時、蘇軾と賈取は詩を作りあったようで、本詩の他に、蘇軾は賈取の詩に唱和して、「吳中田婦嘆」という詩を作っている。ここで「戯れに」と言っているのは、賈取が若い女性と再婚することを「からかって」という意味。

さて、この第一首目は、冒頭で蘇軾が賈取と初対面で意気投合したことを言う。それに続き、「隠棲してあなたの隣に住み、仲良く年を取りたい」と言う。第五、六句は、「私がここに来たのは、屈原のようなあなたが、隠者を招く歌をのどかに歌っているのに惹かれたから」という意味であろう。最後の二句は、蘇軾が自らを省みる。「自分の人生の行先は自ら結論を出すから、天に尋ねるのをやめる」と、きっぱり言う。これは、自分の生き方は、決然と自分で決めるという宣言である。これに続いて、「白髪も年来、不公平にも私の頭に生え出した」と述べる。この句は、唐の杜牧（803年～852年）の「隠者を送る一絶」という詩の「世の中で公平なものは白髪だけだ、高貴な人の頭も見逃さず生える（公道世間唯白髪、貴人頭上不曾饒）」を踏まえる。『蘇軾詩集校注』¹⁰⁾は、蘇軾の「白髮年來漸不公」の句を、杜牧の「公道世間唯白髪、貴人頭上不曾饒」の意味を反対に使ったもので、「高貴な人間は生活が楽で髪の毛はなかなか白くならない。一方、貧乏人は心身ともにすり減らし、早く白髪が生える。白髪も公平さが無い。髪の毛さえこのようであるから、他の事は言わずもがなだ」と説明する¹¹⁾。この説明は、当を得ていよう。つまり、蘇軾は、「今の自分は不遇で貧窮している」と言っているのである。これを前の句と合わせると、本詩の最後は「自分は自分の生き方を貫き通すと決めた。しかし、そのために、不遇な人生を送っている」と解釈できる。先に述べたように、蘇軾は都で新法党と旧法党との権力闘争に卷

き込まれ、自分へ向けられた政敵からの攻撃に嫌気がさし、杭州副知事へ転出した。つまり、当時、蘇軾はまさに「自分は自分の生き方を貫き通すと決めた。しかし、そのために、不遇な人生を送っていい」たのである。

和邵同年戲贈賈収秀才三首 其の二

朝見新萋出旧槎，騷人孤憤苦思家。五噫處士太窮約，三賦先生多誕誇。帳外鶴鳴奩有鏡，筒中錢盡案無鮭。玉川何日朝金闕，白昼闔門守夜叉。

【大意】

年配のあなたが若い妻を娶るのは、(屈原のような)不遇な詩人が孤独に耐えきれず妻がほしいと思ったから。あなたは『五噫歌』を作った貧乏な梁鴻のようで、また、大げさな表現を使って三つの賦を作った司馬相如のようである。あなたの家は(隱者の住まいのように)カーテンの外に鶴が鳴き、(部屋の)小箱には結納の鏡があるものの、筒の中の錢は使い尽くし、机には魚も無い。あなたはいつ、仙術を会得されるのですか。若い妻を娶ったら、昼でも戸を閉めて彼女から離れられなくなりますよ。

第二首には、「この時、賈収は再婚しようとしていた(時賈欲再娶)」という自注が付けられており、専ら賈収が若い女性と再婚することを詠う。「五噫處士」は、後漢の梁鴻(生卒年未詳)のこと。彼は孟光(生卒年未詳)を娶り、二人は互いに尊敬し合い、「拳案齊眉(妻が夫に礼儀を尽くし尊ぶたとえ。また、夫婦が互いに礼儀を尽くし尊敬して、仲がよいたとえ)」という成語が生まれた。また、「三賦先生」は前漢の司馬相如(前179年～前117年)のこと。彼が卓文君(生卒年未詳)と駆け落ちし、成都で二人仲良く小さな酒場を営んだ逸話はよく知られている。つまり蘇軾は、賈収をこの二人に喩えて愛妻家と称え、きっと仲睦まじい夫婦生活を送るであろうと祝福しているのである。最後の二句は、「あなたは再婚したら、一日中、若い奥さんから離れずにいることでしょうか」とからかったもの。「玉川」は、唐の盧仝(?～835年)のこと。彼は「金鷺山の沈山人を憶う二首(憶金鷺山沈山人二首)」という詩を作り、その第二首目で天帝の宮殿を「夜叉が門を守って昼でも門を閉ざし、夜半に祭祀を執り行い夜半に門を開ける(夜叉守門昼不啓、夜半醮祭夜半開)」と詠んだ。蘇軾は盧仝の「夜叉が門を守って昼でも門を閉ざし」という詩句の表現を使い、賈収の再婚相手の女性を「夜叉」で表し、賈収が彼女にべったりする様を「守」の字で詠んでみせたのである。

和邵同年戲贈賈収秀才三首 其の三

生涯到處似檣鳥，科第無心摘領鬚。黃帽刺船忘歲月，白衣擔酒慰鰥孤。狙公欺病來分栗，水伯知饒為出鱸。莫向洞庭歌楚曲，煙波渺渺正愁予。

【大意】

人の一生はどこも風見鶏のようなもの、あなたは簡単に科挙に合格できるのに、その気はさらさらしない。黄色い帽子をかぶった船頭が歳月の過ぎるのを忘れて舟を操り、白衣を着た人が酒を以て孤独を慰める。サル使いは病んだのを侮って栗を誤魔化し、水の神は食い

しん坊なのを知って鱸魚^{ろぎょ}を差し出す。洞庭湖^{とうていこ}に臨んで楚の歌を歌わないでくれ、もやる波が遙かに続き私を本当に悲しませるから。

本詩は、まず、人生を風見鶏に見立てて、方向定まらぬものと詠い出す。そして、賈収が科挙に無関心で、「合格する気が無い」と言う。賈収が科挙試験に「合格していない」のは事実である。それは、「合格したくてもできない」のが実情であったに違いない。しかし、「初対面で意気投合した」相手であれば、「あなたは簡単に科挙に合格できるのに、その気はさらさらない」と表現して相手を持ち上げるのは、詩の常套である。そして、賈収を船頭に喩え、時の経つのに全く関心を持たず、自由気ままに生きていることを言う。

次の第四句から最後まででは、賈収が前妻を失ったことを詠む。「白衣担酒」の語は、『続晋陽秋』に見える「王宏^{おうこう} (? ~ 193年) が陶淵明^{とうえんめい} (356年 ~ 427年) に酒を送った逸話」を踏まえる。「東晋の陶淵明は官を捨てて隠棲していたが、九月九日の重陽の日に酒を買う金が無かった。王宏はそんな彼に、白衣を着た小役人を差し向けて酒を届けさせた」という。蘇軾はこのたび、湖州出張を命じられ、当地に来ている。官職は杭州副知事である。つまり、この句は、賈収を陶淵明に、自分を「白衣を着た小役人」に喩え、自分が湖州行きを命じられたのは「あなたの寂しさを慰めるためなのだ」と表現してみせたのである。これに続く二句も、妻を失った賈収をからかい気味に慰める様子を詠う。「サル使いは(賈収が)病んだのを侮って栗を誤魔化し」の句は、「朝三暮四」の故事を意味する。ここでは、「嘘も方便」の意味で使われ、賈収を慰めるために嘘をつくことを言う。周囲の人は、悪気のない嘘で、彼の沈んだ心を楽しませようとしたのであろう。また賈収を慰めるために、美味しい物を持って来てくれる人もいる。それを詩では「水の神は(賈収が)食いしん坊なのを知って鱸魚を差し出す」と表現する。そして、最後の二句は、『楚辞』の「湘夫人」に「帝堯の娘である湘夫人が北の渚に天下った。遠く離れて会えないことに心悲しむ(帝子降兮北渚, 目眇眇兮愁予)」とあるのを踏まえる。『楚辞』は湘夫人(湘水の女神)に会おうにも会えない悲しみを詠うが、本詩では賈収の亡き妻を湘夫人に喩え、「亡き妻の話題はやめよう。賈収を悲しませることになるから」と、賈収を気遣っているのである。

双荷葉 湖州賈収老小妓名双荷葉(元延祐本『東坡楽府』卷下)¹²⁾

双溪月。清光偏照双荷葉。双荷葉。紅心未偶, 緑衣偷結。／背風迎雨流珠滑。輕舟短棹先秋折。先秋折。煙鬢未上, 玉杯微缺。

【大意】

菖溪^{ちやうけい}の上に掛かる月。清らかな光はひたすら双荷葉を照らす。双荷葉。赤い花芯は未だ綻ばず、緑の葉が目立たないように包む。／前後から風雨を受け、葉の上には雨の滴が流れる。小舟の短い棹が秋の来る前に折り取る。秋の来る前に折り取る。大人の鬢に結び上げる前に、玉の杯は少し欠けてしまった。

本詞は、賈収が再婚する女性のことを詠う。序の「湖州賈収老小妓名双荷葉」に拠れば、彼女の名は双荷葉。詞牌もそのまま「双荷葉」。一説に拠ると、この名は蘇軾が付けたと

も言う¹³⁾。また、「小妓」とあることから、彼女が幼い妓女であったことが分かる。妻を亡くした後、買収は幼い家妓と再婚するようである。

さて、本詞では、彼女の名前に因み、彼女をハスに見立てて詠み、裏に男女関係を含める。苕溪は湖州を流れる川の名。この岸辺に買収の住まいがあった。「緑衣」の語は、『詩経』「邶風」の「緑衣」篇を踏まえる。『詩経』の「緑衣」篇は、妾が寵愛を受け正妻が疎まれることを詠む。これを買収に当てはめれば、彼は正妻を亡くす前から「小妓」を可愛がっていたことになる。こう読むと、次の「赤い花芯は未だ綻ばず、緑の葉が目立たないように包む」という二句は、買収が幼い双荷葉と以前から関係を持っていたことを暗示する。また、ハスの実は秋に収穫するものだが、それを「秋の来る前に折り取る」のは、成熟する前の双荷葉を買収が自分のものにしてしまったことを言う。更に最後の「玉の杯は少し欠けてしまった」というのも、買収が双荷葉の処女を奪ったことを意味している¹⁴⁾。

荷花媚（元延祐本『東坡樂府』卷下）¹⁵⁾

霞苞電荷碧。天然地，別是風流標格。重重青蓋下，千嬌照水，好紅紅白白。／每悵望，明月清風夜，甚低迷不語，妖邪無力。終須放，船兒去，清香深處住，看伊顏色。

【大意】

彩鮮やかな朝焼けのようなハスの蕾^{つぼみ}，碧色の葉は稲妻のように光り輝く。これらは全て生来のもので，格別な趣を漂わせている。重なった碧の葉の下，ハスの花は非常に妖艶で，水面に照り映え，何と赤く白いことか。／明月清風の夜に，ハスはいつも悲しげに遠くを眺め，虚ろな様子で言葉無く，たおやかで力が抜けている。ついには舟を出して清らかな香りの濃く漂う所まで行き，その美しい色を見ずにはいられない。

本詞は，前作の「双荷葉」詞とは趣をやや異にし，双荷葉の美しさを綴る。内容は【大意】のとおりであるが，「明月清風の夜に，ハスはいつも悲しげに遠くを眺め」とは，幼い双荷葉が不安にかられ，実家の方を遠く見ていることを言ったものであろう。最後の「舟を出して」という表現について、『蘇軾詞編年校注』は，「姦通」を意味すると説明している（上冊十九頁）。前作の「双荷葉」詞でも「緑衣」の語を使い，買収が正妻を亡くす前から「小妓」と関係を持っていたことが詠われていた。であれば，本詞にもそれを暗示する表現があると解釈しても無理は無い。ここでは、『蘇軾詞編年校注』の説明に従い，最後の部分を「以前から彼女の所に密かに通っていた」と解釈しておく。

以上，「和邵同年戲贈買収秀才三首」詩と「双荷葉」詞，「荷花媚」詞を見た。詩は三首連作で，各々が異なることを詠んでいる。第一首は，買収と出会ってすぐに意気投合したことが詠まれ，蘇軾自らの生き方が吐露されている。第二首は，特に「この時，買収は再婚しようとしていた（時買欲再娶）」という自注が付けられ，専ら買収が若い女性と再婚することを詠む。愛妻家の故事を引きつつ祝福し，「あなたは再婚したら，一日中，若い奥さんにべったりでしょうね」とからかう。最後の第三首は，買収が前妻を失ったことを詠む。再婚するには，当然，前妻との別れがある。再婚にうきうきする一方で，買収は前妻のことを忘れられない。蘇軾は，彼女の死を悲しみ，落ち込んでしまう買収を慰める。そ

れに対して詞は、再婚相手の女性をハスに喩え、その美しさを称える。そして、年の差がかなりある若い女性と再婚する賈収をからかう。それも、「赤い花芯は未だ綻ばず、緑の葉が目立たないように包む」「小舟の短い棹が秋の来る前に折り取る。秋の来る前に折り取る。大人の鬢に結い上げる前に、玉の杯は少し欠けてしまった」「ついには舟を出して清らかな香りの濃く漂う所まで行き、その美しい色を見ずにはいられない」という一見品のいい表現を使いながら、かなりきわどいことを言う。

詩も「戯れに賈収秀才に贈る」という題が付けられ、第二首目に再婚する賈収のことが書かれていた。ただ、そこでは「一日中、彼女のそばを離れない」程度の戯れであった。一方詞は、情事まで詠う。あるいは、二人の秘密が詞によって暴露されたのかもしれない。男女関係をからかいつつ詠むには、やはり詞がふさわしい。先に述べたように、詞は、そもそも宴席で興を添えるものであり、詠われる内容は、主に妓女のなまめかしい姿態、男女の恋愛、別離などであったからである。

最後にもう一点、付け加えたい。それは、詩に賈収が妻を失ったことが詠われていることである。前妻の死は、やはり詞では詠えないだろう。蘇軾は、再婚に心躍らず賈収が、同時に亡き妻のことも忘れられずにいることを見て取った。そこで「戯れの詩」を作りつつ、慰めの言葉も伝えようとしたのである。一方、賈収が良からぬことをしていたことを知ってしまった。それを、詞でもって暗喩を駆使してからかったのである。

5 「八月十五日看潮五絶」詩と「瑞鷓鴣（碧山影裏小紅旗）」詞

熙寧六年（1073年）八月十五日中秋の日、杭州副知事の蘇軾は、^{せんとうこう}錢塘江の逆流である「^{かいしやう}海嘯」を見に行った。「海嘯」については、宋の^{さじぼく}呉自牧著『夢梁録』巻四に「観潮」という項があり、以下のように書かれている。「臨安（杭州）の風俗は四季いつでも豪気であり、毎日のように遊覧してすごせる。…東には一度はみるべき^{せうりやう}錢塘の大潮がよせ、いずれも絶景である。毎年八月は、怒涛のすさまじさが日頃にまさる。…人々は十一日から見物に出かけ、十六、十八日には城内からくり出す乗り物でござたがえす。二十日になるとやや下火になる。…家々の高い場所は、すべて上流の^{かんがん}人士や宦官が借りきって、観潮の席とする」¹⁶⁾。蘇軾はこの時、「八月十五日看潮五絶」という五首連作の詩と「瑞鷓鴣」という詞を作り、「看潮」を詠っている¹⁷⁾。まず、「八月十五日看潮五絶」詩を見てみよう。

八月十五日看潮五絶 其の一（『蘇軾詩集合注』巻十）

定知玉兔十分円、已作霜風九月寒。寄語重門休上鉤，夜潮留向月中看。

【大意】

今夜は中秋の満月であることはちゃんと分かっているが、霜を含んだ風が吹いて既に九月の寒さになっている。伝言をする、「街の城門に鍵をかけるのをやめてくれ」と、夜に逆流してくる潮を、川辺に留まって月明かりの中で見たいから。

第一首は、まず、今夜が中秋であるにもかかわらず、冷たい冬の風が吹いていることを言う。ただいくら寒くとも「夜に逆流してくる潮を見たい」という願望を詠う。蘇軾は門衛に「街の城門を開けておいてくれ」と頼む。街は中秋節でもあり賑やかであったに違いない。満月の中で見る「海嘯」も、さぞかし壮観だったのだろう。夕刻になると閉められる街の城門を「今夜は閉めないでくれ」という言葉に、蘇軾の「看潮」を存分に楽しみたいという思いが素直に表れている。

八月十五日看潮五絶 其二

万人鼓噪懼呉儂，猶似浮江老阿童。欲識潮頭高幾許，越山渾在浪花中。

【大意】

(海嘯は)万人が楽器を鳴らし大声で叫ぶような轟音を立てて呉の人を恐れさせる。それは、あたかも王濬おうしゆんの水軍が錢塘江に船を浮かべて攻めて来るかのようなのである。その潮の波頭の高さがどれくらいかを知りたいのならば、越の山が全て波頭に飲まれてしまうのを見ればいい。

第二首は、まず「海嘯」の迫力を描く。「海嘯」は壮観であると同時に、聴覚的にも迫力満点で、轟音を立てて押し寄せ、呉(今の江蘇省一帯の地)の人々を怖がらせる。第二句の「王濬(206年～285年)」は東晋の人で、「阿童」はその幼名。彼は益州(今の四川省)の長官を務めていた時、軍船を仕立てて東に下り呉を滅ぼした。最後の「波は越(今の浙江省一帯の地)の山を凌ぐほど高い」というのは、もちろん誇張ではあるが、間近で見る「海嘯」は、そう書いても違和感がないほどに高かったに違いない。なお、「呉」「越」は、蘇軾が今いる杭州の一帯を指す。だから、「呉の人」「越の山」と言い、呉を滅ぼした「王濬」を出したのである。

八月十五日看潮五絶 其三

江辺身世兩悠悠，久与滄波共白頭。造物亦知人易老，故教江水更西流。

【大意】

錢塘江の岸辺にいる自分は、世の中から隔絶され、久しく波頭と同じように頭髮は白い。造物主も自分が老い易いを知って、わざわざ川を逆流させて西に流す。

第三首目は、自らの境遇を重ねて詠う。「今の自分は世の中と相容れず、はじき出され取り残されている。そして、髪の毛が白くなって、もう久しい」と嘆く。これは、都を追われるように出てきた自己の不遇を顧みての言葉である。先に見た「和邵同年戲贈賈秀才三首」の「白髮も年来、貧乏な私の頭にも不公平に生えだした(白髮年来漸不公)」と重なる思いである。これに続く後半の二句は、己の白髮と「海嘯」を結びつける。「造物主(万物の創造主)は自分が白髮頭であることを知り憐れんで、時間を巻き戻し、若返らせてくれているのだ」と言う¹⁸⁾。絶え間なく流れ去る川の流れに時間の経過を感じ取るのは、孔子が川の畔で「過ぎ行くものは正にこのようだ。昼も夜も止まることが無い」(『論

語]「^{しかん}子罕」篇)と歎じたように、古来しばしば見られる表現である。蘇軾はここでそれを逆用する。川の水が大海から上流に逆流する「海嘯」を、造物主が時間を巻き戻すために起こした現象と表現する。それは、「海嘯」が常識ではとても理解できないものであり、「神の仕業」とでも言わなければ受け止められぬ現象であったからだろう。この部分、もう少しこだわってみたい。それは「造物主は自分が白髪頭であることを知り憐れんで」という表現である。「自分は世の中から隔絶され」ているというのは、不遇を嘆く言葉である。しかしながら、世の中を司る造物主は自分のことを見放してはいない。少なくとも自分が苦労のために髪の色が白くなってしまったことを慮ってくれる。

人生で思い通りいかない時、心の支えがあれば、焦らずに、また、腐らずに時を待つことできる。まして、造物主の眼差しを感じていれば心強い。蘇軾が造物主、天、さらには運命等をどう考えていたのかは、非常に興味深い研究テーマである。不遇を嘆きながらも造物主の暖かさを感じていることを述べた本詩は、それを解明する資料の一つである。ただそれは、本稿のテーマとは異なるので、ここでは、これ以上深入りせず、機会を改めて論じてみたい。

八月十五日看潮五絶 其の四

呉児生長狎濤淵，冒利輕生不自憐。東海若知明主意，応教斥鹵變桑田。

【大意】

呉の若者は小さい時から荒波立つ淵に馴れていて、金目当てに命を疎かにして自分を大切にしない。東海の神がもしも天子の心を知ったなら、塩分の多い土地を桑畑に変えるに違いない。

本詩には「この時、新たに弄潮^{ろうちよう}を禁止する詔が出た（是時新有旨禁弄潮）」という自注が付けられている。「弄潮」は、逆流する波に乗る遊び。当時、その遊びで命を落とす者が多かったので、禁令が出された¹⁹⁾。前半の二句は、その事を言う。

後半の二句では、「海の神」と「皇帝」が登場する。ここで「海の神」を持ち出したのは、「海の神」が「海嘯」を引き起こしたという発想があったからに違いない。前作では「海嘯」を「造物」が起こした現象と言ったが、ここでは、「海の神」に置き換えたのである。この二句の意味は、そのような人知では測れない力を持つ「海の神が、皇帝の熱い思いを知ったなら、きっと皇帝に代わって塩分の多い土地を桑畑に変える難事業を行ってくれるでしょう」ということ。素直に解釈すれば、「陛下、心配は要りません！ この難事業も海の神がきくと味方について無事成し遂げられます」と言っていることになろう。

実はこの詩句、詩に朝政批判があることで蘇軾が捕えられた詩禍事件「^{うだいしあん}烏台詩案」の、証拠の一つとして取り上げられている。「蘇軾は、皇帝が積極的に進めている水利事業に利少なく害多いと考えていた。本詩の後半二句は、その事業が絶対に実現できないことを言ったもので、朝廷の水利事業は実現性が薄いと批判している」という罪状であった²⁰⁾。

本二句、確かに少々見方を換えて読めば、「皇帝だけでは、この難事業を成し遂げられません」と言っているようにも読める。「東海の神が皇帝の熱い思いを知ったなら」とは、

仮定、条件である。ということは、この時、「東海の神は」未だ「皇帝の思いを知らず、手伝ってはいない」ことになり、「塩分の多い土地を桑畑に変える」という事業は未だ完成を見ていないことになる。それは「皇帝だけでは成し遂げられない」ことにも繋がる。更に「塩分の多い土地を桑畑に変える」とは、かなり大がかりな事業である²¹⁾。おそらく、当時、政府は大規模な水利事業を行っていたものの、順調には進んでいなかったのだろう。蘇軾が批判を込めたかどうかは別として、彼がその水利事業を「塩分の多い土地を桑畑に変える」ことに喩えて詩に詠った可能性は十分にある。それが、朝政批判の嫌疑となってしまったのではないか。

八月十五日看潮五絶 其の五

江神河伯兩醜鷄，海若東來氣吐霓。安得夫差水犀手，三千強弩射潮低。

【大意】

長江の神と黄河の神は酢を入れる瓶に湧く虫のようで、海の神は虹を吐いて東から迫り来る。何とかして水犀の鎧を着た夫差の兵士を得て、三千の大弓で潮を射て低くしたいものだ。

本詩の前半二句は、改めて「海嘯」の勢いを述べる。逆流の勢いは海の神が押し寄せるようで、黄河の神も長江の神も小さな虫のようだと、大きなスケールで詠う²²⁾。後半の二句もスケールが大きい。蘇軾は、迫りくる「海嘯」に挑みかかる。「夫差（?～前473年）」は、中国春秋時代の呉の第七代王。彼には水犀（サイの一種）の皮で作った鎧を着た屈強な兵士がいたと言う²³⁾。その兵士三千人に大弓を引かせて「海嘯」の勢いを抑えてやりたい、と言う。

瑞鷓鴣（『宋傅幹注坡詞』卷十二）

碧山影裏小紅旗。儂是江南踏浪兒²⁴⁾。拍手欲嘲山簡醉，齊聲爭唱浪婆詞。／西興渡口帆初落，漁浦山頭日未歛。儂欲送潮歌底曲，樽前還唱使君詩。

【大意】

碧の山（のような波）の中に見え隠れする小さな赤い旗。（波乗りの若者は）「俺は江南の波乗りだ」（と叫ぶ）。手を打って酔った山簡をからかおうとし、声を揃えて「浪婆詞」を歌う。／西興の渡しに、いま帆が下ろされ、漁浦の山頂には日が傾かずに掛かっている。我々は潮を送るのに何の曲を歌おうか、酒樽の前ではやはり杭州知事様の詩を歌おう。

本詞の冒頭「碧の山（のような波）の中に見え隠れする小さな赤い旗」は、禁令が出されたにもかかわらず、命知らずの若者が旗を持って我先に「弄潮」する様子を描く。「碧の山」は、「海嘯」の波を言う。先に見た「八月十五日看潮五絶」詩第二首にも「その潮の波頭の高さがどれくらいかを知りたいのならば、越の山が全て波頭に飲まれてしまうのを見ればいい」とあり、「海嘯」の波の巨大さを詠っていた。泳ぎの達人な者は、その大波に挑もうと乗り出してゆく。次の「俺は江南の波乗りだ」というのは、波乗りの若者達の威勢のいい叫び声である。この後、詞は川辺での宴会の描写に移る。「山簡（生卒年未詳）」は、

晋の人。酒好きであった。ここでは、杭州知事の陳襄^{ちんじょう}(1017年～1080年)を指す。この日は、役人も仕事を休み「潮（海嘯）」を見に来た。この日の宴会は盛り上がり、陳襄は酔っ払い、手を叩いてからかわれるしまつ。周りの民衆は、「海嘯」の到来に声を合わせて、波の神を迎える「浪婆詞」を歌う。

詞の後半は、「海嘯」が過ぎ去った後の様子を描く。「西興」「漁浦」は地名。「船が帆を下ろし係留されている」とは、大波が去り水面が静まったことを表す。「山頂には日が傾かずに掛かっている」とは、時間がさほど経過していないことを意味する。「海嘯」は凄まじい勢いで押し寄せて来たかと思うと、あっという間に去り、水面には早くも静けさが戻ったのである。そして、川辺での宴会も、そろそろお開きになる。誰かが「我々は潮を見送るのに何の曲を歌おうか」と言うと、すかさず蘇軾は「酒席では、やはり杭州知事様の詩を歌おう」と応じる。

以上、「八月十五日看潮五絶」詩と「瑞鷓鴣」詞を見てきた。蘇軾は錢塘江を逆流する「海嘯」現象を見物しに行き、様々に想像を膨らませ、内容豊富な五首の詩を作った。「海嘯」の迫力を、聴覚的に訴え、呉を滅ぼした「王濬」の水軍に喩え、波の高さは山を凌ぐほどだと言う。そして、己の白髪と「海嘯」を結びつけ、自らの不遇を詠う。更には「海嘯」を造物主が起こした時間の巻き戻しの現象と表現する。そこには、蘇軾が「自分は世の中から隔絶されているけれども、造物主は自分のことを見放してはいないという思いも綴られている。また、「弄潮の禁令」に触れ、当時、政府が進めていた水利事業にも言及する。そして最後は、改めて「海嘯」の勢いを大きなスケールで述べる。「逆流の勢いは海の神が押し寄せるようで、黄河の神も長江の神も小さな虫のようだ。自分は夫差の兵士三千人に大弓を引かせて『海嘯』の勢いを抑えてやりたい」と勇ましく叫ぶ。

一方詞は、まず「弄潮」の勇ましさを描く。それに続き、知事を登場させ、大盛り上りの宴席と見物の人々の様子を描く。そして、逆流の過ぎ去った静けさが描かれ、最後は「知事の詩を歌って宴をお開きにしよう」という蘇軾の言葉で結ばれる。詞には、迫り来る「海嘯」の描写は無い。そこには、王濬の水軍も、造物主も、東海の神も、夫差の兵士も書かれていない。また、自らの不遇も詠わず、「弄潮の禁令」にも触れず、水利事業にも言及しない。そこに描かれているのは、知事の前で禁令を破り「弄潮」をする若者であり、酒を飲みながら「観潮」を満喫する人々の様子である。酔っばらった知事、声を揃えて「浪婆詞」を歌う民衆、「酒席ではやはり杭州知事様の詩を歌おう」と叫ぶ蘇軾。皆、本当に楽しそうである。そこには、気負いは無く、表現の妙を競おうとする思いも無い。詞は詩に比べ、ざっくばらんな姿が書かれている。「海嘯」を詠おうとした時、詩では、いかに巧みな比喻を駆使して表現するか、士大夫として男子としていかに勇ましい思いを描くかに力が注がれた。一方、詞では、肩の力を抜き、見物を楽しむ人々の姿を自由に描くことができた。これが両者の内容の違いとして現れたと考えられるのである。

6 むすび

以上、四組の同時に作られた詩詞を見てきた。そこから以下のことが指摘できる。詩は、士大夫としての立場に立ち、自らの考え、生き方、主張、情感を前面に出して詠っている。周の幽王、秦の始皇帝、二世皇帝、唐の玄宗皇帝を容赦なく非難し、伝統的な経書のみにとらわれて視野が狭い「愚儒」に対する皮肉を述べている。また、大きなスケールで描き、造物主、東海の神を持ち出す。加えて、政府が行っている水利事業まで言及する。それは、当時、蘇軾が若かったことも、要因の一つと言える。ただそれ以上に、詩が伝統文学で、士大夫として身に付けておくべき教養の一つであったことに因ろう。

一方詞は、自らの考え、主張、情感を直接には語らない。風景描写を用いて、象徴的に間接的に表現したり、行間に織り込んだりする。また、その思いは、士大夫であって初めて共感できるものではなく、人間誰もが共通に抱く感懐である。また、歌姫、妓女、男女の情事を描く。それは詞という文学が、もともと妓女のなまめかしい姿態、男女の恋愛などを多く詠うものだったからである。更に、歌姫、妓女だけではなく、知事も登場させる。但し、しかつめらしい顔で職務を執り行う知事ではない。大盛り上がりの宴席で酔っ払いへべれけの知事である。詞に描かれた人々は、みな本当に楽しそうである。それは、詞が宴席で興を添えるところから始まった新興の文学であり、自由に、ざっくばらんに描ける文学様式であったからである。

本稿では、特に蘇軾の初期の同時に作られた詩詞を取り上げて論じた。今後は、蘇軾の他の作品、更に蘇軾以外の作品も含めて考察を進め、中国文学史における詩詞の位置づけを明らかにしてみたい。

〔注〕

- 1) 筆者はこれまで、蘇軾の詩詞を取り上げ、両者の詠み分けを考察してきた。詳しくは拙著『新興与伝統 蘇軾詞論述』（上海古籍出版社、2005年）参照。
- 2) 「試論蘇軾的詞和詩之比較」（『新興与伝統 蘇軾詞論述』所収）参照。
- 3) 蘇軾の詩詞の「同一年作品群」として、熙寧七年（1074年）に三組、元豊元年（1078年）に四組、そして元祐六年（1091年）に五組がある。熙寧七年については「蘇軾の熙寧七年に作られた詩詞について」（『総合文化研究』第十七巻第三号、2012年）としてまとめ、元豊元年については「蘇軾の元豊元年に作られた詩詞について」（『風絮』第八号、2012年）としてまとめた。
- 4) 熙寧七年の同時制作の作品は以下の三組である。
 - I 「柳子玉亦見和因以送之兼寄其兄子璋道人」詩、「送柳子玉赴靈仙」詩、「昭君怨（誰作桓伊三弄）」詞。
 - II 「潤州甘露寺彈箏」詩、「采桑子（多情多感仍多病）」詞。

- Ⅲ「次韻陳海州書懷」詩、「次韻陳海州乘槎亭」詩、「浣溪沙（長記鳴琴子賤堂）」詞。
- 5) 「驪山三絶句」詩の編年については二説有るが、ここでは、『蘇軾年譜』に従い、治平元年十二月、鳳翔府簽判の任を終え、長安を経て驪山を通った時の作とする（上冊一三三頁）。もう一つの編年は、嘉祐六年（1061年）、蘇軾が鳳翔府簽判を命じられ、都から鳳翔に赴任する途中驪山を通った時の作とするもので、『蘇軾詩集合注』の説である（巻三第一冊九四頁）。確かに蘇軾は、嘉祐六年も驪山を訪れた可能性は十分にある。しかし、蘇軾が間違いなく驪山を訪れた証拠があるのは治平元年である。詳しくは『蘇軾年譜』参照。
 - 6) 『宋傳幹注坡詞』には、この詞序が無い。ここでは元延祐本『東坡樂府』巻下に拠った。
 - 7) 『蘇軾詞編年校注』の編年に拠れば、本二詞は、第三、四番目に排列されており、ごく初期のものである。
 - 8) 『蘇軾年譜』巻十一、上冊二三二頁参照。
 - 9) 平凡社東洋文庫七二七『宋詩選注』（平凡社、2004年）第二冊三十二頁参照。
 - 10) 『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、2010年）所収。
 - 11) 巻八、第二冊七九九頁。
 - 12) 本詞は、『宋傳幹注坡詞』目次にあるものの詞の本文は失われて伝わらない。ここでは、元延祐本『東坡樂府』巻下に拠った。
 - 13) 宋・呉聿の『觀林詩話』に見える。『続歴代詩話』（中華書局、1981年）、第一冊一二〇頁参照。
 - 14) 『蘇軾全集校注』『蘇軾詞集校注』巻一、当該詞の「玉杯」の「校注」に「ここでは、玉杯を用いて処女の体を喩える（此処用玉杯喩処女身体）」とある。
 - 15) 本詞は、『宋傳幹注坡詞』目次にあるものの詞の本文は失われて伝わらない。ここでは、元延祐本『東坡樂府』巻下に拠った。
 - 16) ここで引用した訳文は、平凡社東洋文庫六七四『夢梁録』（平凡社、2000年）巻四「觀潮」、第一冊一七四頁に拠る。
 - 17) 本詩詞は拙稿「試論蘇軾の詞和詩之比較」（『新興与伝統』所収）でも取り上げた。合わせて参照して頂きたい。
 - 18) 「人の老い易さ」の「人」は、その前に自分の白髪を述べていることから、蘇軾自身を指すと考えられる。「人」が作者自身を指すことは、詩においてはよくある表現方法である。
 - 19) 『夢梁録』巻四「觀潮」参照。
 - 20) 『烏台詩案』に「軾謂主上好興水利，不知利少而害多，…言此事之必不可成，譏諷朝廷水利之難成也」とある（『蘇軾資料彙編』上編二、五九三頁）。
 - 21) 「塩分の多い土地を桑畑に変える」とは「桑田滄海」の成語を踏まえる。「桑田滄海」は、『神仙伝』『麻姑』に見える「私は既に海が三回桑の畑になるのを見た（已見東海三為桑田）」という記述に基づき、世の中の変化が非常に大きいことを言う。蘇軾の詩では、それを踏まえ、大きな変化を伴う事業を「塩分の多い土地を桑畑に変える」と表現したのである。

- 22) この詩にも「呉越王はかつて大弓で波頭を射て、海神と戦った。以来、水は街に近づかない（呉越王嘗以弓弩射潮頭，与海神戦。自爾水不近城）」という自注が付けられている。
- 23) 唐の杜牧の「潤州」詩其の一に「夫差伝裏水犀軍」とある。
- 24) 「儂是江南踏浪児」の句、『宋傅幹注坡詞』卷十二では「儂是江南踏雪浪児」に作る。「雪」の字は衍字。よって本文では省いた。
- 本稿は平成23年度日本大学商学部研究費（個人研究）の研究成果の一部である。

(提要)

《苏轼同时所作的诗和词～关于他初期的作品～》

苏轼有十几套同时同地所作的诗和词。本文把他初期所作的四套作品做个比较，考察诗和词之差别。这里所考察的四套作品就是治平元年（1064年）的《骊山三绝句》诗和《华清引》词，熙宁四年（1071年）的《十月十六日记所见》诗和《南歌子》词，熙宁五年（1072年）的《和邵同年戏赠贾收秀才三收》诗和《双荷叶》《荷花媚》词。从这些作品的内容，可见如下的诗和词之差别：

苏轼的诗，站着士大夫的立场来，把自己的看法，人生观，主张以及情感正面地写出。不客气地批评周幽王，秦始皇帝，二世皇帝，唐玄宗皇帝，并讽刺了眼光狭隘的愚儒。利用很大胆的笔法，言及到造物主，东海神，或政府的水利事业。这些诗所表现出的特点是，由于诗是传统文学，也是士大夫必须具有的教养之一。

苏轼的词，不是直接的表现，而是用风景描写来，象征和间接的表现来歌咏自己的看法，主张以及情感。这里所写的内容，不是只有士大夫才能共鸣，而是大众百姓也都能共感的。此外，词也描写歌女，男女情事，有时候还写了醉酒的知事。苏轼这些词的特点，由于词本来是在酒席上所作的新兴文学，可以自由和不拘束地制作之文学样式。